

## 台湾アミの歌

## —異界との交流手段としての歌—

草場 英子

## Abstract

Sometimes songs express the feelings of singers. Also among the Amis people, songs are recognized as the method of communication with supernatural beings called *Kawas*.

There are/were some religious specialists called *Si-kawas-ay* in every Amis village. When they hold their ritual, they sing the songs of gods (*Kawas*) which are related to that ritual. Every *Kawas* has its peculiar song and melody. According to their rituals, the religious specialists *Si-kawas-ay* choose gods (*Kawas*) and sing each gods song exactly. Nowadays not a few *Si-kawas-ay* change the style of religion. They become Chinese shaman called *Tang-ki* rather than *Si-kawas-ay*. However after they become *Tang-ki*, they continue to sing the songs of gods (*Kawas*) when they hold their rituals even though Chinese *Tang-ki* does not have that type of song.

Every Amis village holds a harvest festival in summer. The last day of festival there is a rite which makes offerings to the dead people (called *Kawas*) who die after the last harvest festival. While all villagers make a circle and dance to the traditional songs of Amis, the chief of the village, old men and the family members of dead persons go into the circle, and call the names of dead persons and give offerings.

Also there is a special melody for dead people. The spouse of a dead person cries loudly. Hearing the crying, we notice that her/his crying has its own melody. It is a melody for the dead person.

It is believed that in the old days there were some monsters in Amnis villages. Now Amis people say that when the monsters come into the human world, they appear groaning with their own melody.

So the people of Amis recognize that songs are a very important tool and method of communication with supernatural beings (*Kawas*).

はじめに

日本でも最近、ときどき台湾先住民の歌を耳にすることがある。デパートで、あるいは音楽関係の店先で。2002年3月に亡くなったが台湾先住民音楽の人間国宝といわれたアミの郭英男 (*Difang*) さんは、日本のテレビなどでもしばしばその歌いっぷりが放映されたり、歌声が各種番組の中に挿入されたりして、それと知らずに見たり聞いた人も多いのではなからうか。あるいは、台湾旅行をした人は、観光コースにアミの歌と踊りのショーが入っていることが多いので、それを楽しんだ方も少なくないのではなからうか。

アミの人たちは、よく歌を歌う。結婚式で、誕生会で、あるいはアミにはスラル *solal* という年齢階梯組があるが、その同じ階級の仲間が集まったときなど、酒を飲み、歌を

歌う。生活のいろいろな場面で歌が歌われる。そもそも歌というものは、喜怒哀楽の表現手段のひとつとして認められている部分があるが、アミの人たちは、歌をこうした場面で使用する一方、超自然的存在 (*supernatural beings*) と交流するときに必要なものだとも考えている。歌は超自然的存在へ呼びかけ、異界と交流するための道具であり、方法なのである。

アミの人にとっての歌を、特に異界との交流に焦点をおいて以下みていくことにする。

## 1 異界と交流するシカワサイと神歌

異界に存在するとされる超自然的存在のことをアミ語でカワス *kawas* という。具体的にみていくと、カワスとは、神、祖先、死者、妖怪、オバケ、化物など、すべての

超自然的存在を指しており、時には異民族のそうしたものをも含んでいる。アミには、カワスと関わることができることとされるシカワサイ *si-kawas-ay* という宗教的職能者たちがいる。アミ語の意味は、カワスをもつ者である。その名称の示すとおり、それぞれのシカワサイは各自が祭祀しなければならぬカワス（神）をもつ。シカワサイは複数のカワス（神々）を守護神としてもっている。霊力があがるにつれ、所有するカワス（神々）の数も増えてくる。

一般の人々はカワスと交流できないので、シカワサイに頼んでカワスとの交流をしてもらい、こちらの意志を異界に伝えたり、異界からの要求をきいてもらったりする。具体的には、祖先祭祀や死者儀礼のとき、農作物の豊作祈願や収穫への感謝のとき、病気にかかったとき、家の増改築にともなうお祓いのときなど、シカワサイに儀礼を依頼する（原 1997:65-67）。シカワサイは、儀礼の種類によって関わるカワス（神）を使い分ける。カワスは、それぞれが自分の歌をもっている。だからシカワサイたちは儀礼によって、必要とされるカワスの歌を歌って供物を奉げる。儀礼によって必要なカワスが異なるので、儀礼によって、歌う歌が異なっている。たとえば収穫祭で必要とされるカワスは祖先、植物神、収穫神である。だから収穫祭では祖先の歌を歌って祖先たちに供物を奉げ、植物神の歌を歌って植物神に供物を奉げ、収穫神の歌を歌って収穫神に供物を奉げる。

毎年9月に入ると、シカワサイたちが自分のカワス（神）に供物を奉げて祭祀するミルツク *mi-lecok* といわれる儀礼が各部落ではじまる。毎日1人～2人のシカワサイが、自分もつ神を祭祀するため、自己の帰属するシカワサイ集団のメンバーを自家に招き、全員が庭でカワスの道を歩き<sup>(1)</sup>、カワスの歌を歌い供物を奉げる。カワスの道を歩くとき、さまざまな所作をしながら歩く。たとえばカワス世界に登り坂の場合、一歩踏み出してはもう一歩をその場で足踏みする。また下り坂の場合、後ろ向きに中腰で進む。あるいは川があると飛び越し、藪があると地を這うなどの所作をする。シカワサイたちはまるで踊っているようなので、アミの人たちは、これをシカワサイの踊りといっている。こうして異界のカワス世界でカワス（神）を遥拝する場所にたどりつく。そこでカワスの歌を歌い供物を奉げる。シカワサイはまさに神歌の専門家集団なのである。

## 2 宗教の漢化と神歌の変化

現在、アミの子どもたちはアミ語を日常語とはしていない。最近、学校で母語教育として民族語が授業で教えられようになったが、子どもから大人まで学校の試験をほじ

め資格試験等はほとんどが中国語で実施され、日常は中国語の使用が多い。ときどきラジオからアミ語の番組が聞えることがあるが、放送の多くは中国語である。現在、日常すべてのことを民族語であるアミ語で考えている世代は高齢化している。それほど日常は、民族語とは異なる言語、中国語化されている。

そうした言語同様、宗教にも異民族である漢人の影響をみることができる。そもそもアミのカワス（神々）にはアミ語で話しかけるものであるが、言語としてのアミ語を知らない世代が増加すると、アミのカワスたちへの話しかけができなくなるという問題が無視できなくなる。漢人にはタンキー（童口）とよばれるシャーマンがいる。シカワサイのタンキー化<sup>(2)</sup>などアミの宗教の漢化は、第二次世界大戦前からすすんでいたようである（古野 1945:282）。あるいは、祖先や神仏を祭祀する棚に漢人式の祭壇を使用したり、漢人式に祖先の名前を書いた位牌を祭祀したりするなど宗教の漢化は、現在では特に珍しいことでもなくなっている。

シカワサイとタンキーの顕著な違いは、神との関わり方にある。シカワサイは、カワスと対話をする事で異界と交流する。交流の形態は2種類ある。カワスを人間界よんできて、対話する形態と、シカワサイの魂が脱魂してカワス世界に行き、そこで見聞きしたものを帰ってきて報告する形態である。脱魂した状態の身体は、いわば抜け殻状態で、外見的にはただ寝ているように見える。一方、タンキーは、神仏がタンキーに憑依する。憑依している神仏はタンキーの肉体を借りて話しをすることで神と人間が交流する。アミのタンキーの場合も漢人のタンキー同様に神仏はアミのタンキーに憑依し、肉体を借りて言葉を告げる。アミのタンキーが漢人のタンキーと大きく異なるのは、漢人の神仏だけではなく、時にはアミのカワスが憑依することがあることである。アミのカワスはシカワサイには憑依しないが、アミのタンキーには憑依する。アミのタンキーには漢人の神仏とアミのカワスが憑依する。憑依したのが漢人の神仏なのか、アミのカワスなのかを知るには、そのタンキーが話す言葉に気をつけるのもひとつの手がかり

になる。漢人の神々が憑依すると、タンキーは多く<sup>びんなん</sup>□南語で話をはじめ。一方アミのカワスがつくとアミ語で話をはじめ。あるいは、アミのカワスが憑くと、歌を歌うことがある。その歌は憑依したとされるアミのカワスの歌で、本来ならシカワサイが儀礼中に、カワスを祭祀するために歌う歌である。ところがアミのタンキーの中には、そうしたシカワサイの神歌を修得していない者もいる。そうした者は市販されているアミの歌曲カセットを流しながら、儀

礼をする場合も見られる。

以上のように、アミのシカワサイがアミのカワスと交流するという宗教的行為は、シカワサイからタンキーへという宗教的職能者の変化をとめないながら、大きく変わってきた。しかし異界との交流に、歌が重要性であるという認識は依然として保持されている。

### 3 豊年祭ミリスン *mi-lisin* での歌とカワスの交流

アミ観光でもっとも有名な年中行事は、歌と踊りの祭典、豊年祭であろう。花蓮近郊ではミリスン *mi-lisin* とよんでいる。毎年、各地のアミが催す豊年祭は、7月の台東を皮切りに、日々の進行とともに開催地は徐々に北上する。アミ居住地の北端花蓮にたどりつくころはすでに8月下旬から9月はじめとなっている。豊年祭は各アミの部落でおこなわれるが、これとは別に、観光などのため、いくつかの部落が合同で行う豊年祭もある。豊年祭で着られる各地のアミの民族衣装は、地域によって色や形に変化がみられる。しかし、豊年祭が数日にわたる歌や踊りの祭典であることは、地域によらず共通している。

細部の内容は部落によって違いがあるが、花蓮近郊のリダウ *Lidaw* のミリスンを例に、歌とカワスの関わりをみる。ミリスンの最終日、昨年の豊年祭以降、部落で死んだ者たちの供養をおこなう儀礼がある。頭目と長老<sup>(3)</sup>、それに死者の家族が皆の踊る輪の中に入り、部落全員が踊りを踊り、歌を歌っているまさにその輪の内部で、死者の魂（アディゴ *adingo*）がよび降ろされ、供養される。シカワサイは同じ輪のなかに入り、頭目や長老と呼ばれた死者の魂や、死者の家族のケガレが悪い影響を与えないように、踊る者たちのお祓いをする。シカワサイたちはバナナの葉をもち、一人一人をバナナの葉でなでる。そうすることによって災厄をもたらすカワスが身体から祓われると考えられている<sup>(4)</sup>。こうしたカワス（死者）との関わりは、ミリスンの歌と踊りの輪のなかで举行されているのである。

### 4 死者への号泣とメロディー

アミの人たちは歌をよく歌う。結婚式など嬉しいときに歌は欠かせない。こうした喜び事とは反対に死者への追悼として、悲しみの表現として、号泣するとき一定のメロディーがきかれる。

人が死去すると、遺体はしばらく家屋内に安置される。現在では遺体がいたまなないように、また訪問者が最後のお別れをできるように、上面が透明のガラス張りになってい

る特殊な冷蔵棺桶に安置される。アミの場合、漢人ほど埋葬の日取りや時刻を気にしないとはいえ、遺体は1週間ほど家屋に安置されることが多い。その間、死者と関わりのあった友だちなどが死者の家を訪れ、そこで話をしながら夜を明かす（パコンコ *pa-konnko*）。死者と関わりのあった者ほど、長く、幾晩も死者の家で語り明かす。

その間、訪問客をもてなすのは死者の家族である。死者の配偶者は、人前に出るとは恥ずかしいことだとされているので、訪問客の前に出て行って挨拶をすることはない<sup>(5)</sup>。訪問客が死者の棺桶まで、死者への挨拶にきたときは、家の奥に身を隠すこともある。別室で昔語り（パコンコ）をしている訪問客には、残された配偶者が死者の棺のそばで号泣するのがときどき聞こえてくる。

残された配偶者は、人前に姿を現さず、非常に大きな声で泣く。泣きながらどうして私を置いてしまったのか、などと死者に話しかける。そして泣く。また話しかける。そういうことを繰り返すが、その泣き声は一定のリズムを帯びている。それは死者の号泣のときにのみ聞かれる特殊なメロディーである。この死者への号泣のメロディーは配偶者だけではなく死者のキョウダイなどもおこなう。また、埋葬後、死者への供養が日を空けず行われるが、こういうときにも同じメロディーをもった泣き方がなされる。

これまでみてきたように、死者というカワスと交流するための手段として、号泣はメロディーをいれるのがみられる。泣き声を特殊なメロディーにのせることで人々は異界と交流するための力をもつ。メロディーにのせた泣き声は異界と交流するための道具だと考えられているのである。

### 5 化物の出現と歌

アミには化物のようなカワスがいる。1935年に台北帝国大学言語学研究室から『原語による台湾高砂族伝説集』が出版された。そのなかにアルカカイ *Arkakay* という化物のようなカワスが出てくる。ナタウラン *Nataoran* 社の話として、母親に化け、子どもの内臓を食べた話や、漁獲祭ミラディス *mi-ladis* で男たちが河に魚捕りに行っている間、男たち似に化けてやってくる。そうして妻たちと寝て子どもまで生ませるといふ悪事を働いた化物である。

（台北帝国大学言語学研究室 1935:532-538）

現在でもアミの人たちは、夜にアルカカイがやってくることがあるという。そのときは独特の<sup>うな</sup>唸り声を、独特のメロディーにのせてやって来るのでわかるという。屋根に覆い被さり、中にいる人間を捕まえようとするともあると

いう。

この他、アミにはタダタダ、*Tadatadah* という化物のカワスもいるとされている。このカワスも人間に化け、人間界にやってくることもある。独特の唸り声をメロディーにのせながら出現するとされている。そうして人間、特に赤子を捕まえ、木の枝分かれをしている場所にかけてり、海の波打ち際において、波が来ると赤子を砂浜の内側に引き、波が引くと赤子を波の際まで押したりを繰り返すという。タダタダは、特別な数で数を数える。その数は数え歌風のメロディーにのせて数えられる。この数詞のことを「カワスの数え方」といつている。

これらにみるように、化物のカワスも、人間界にやってくる時は独特の声とメロディーをもつと考えられている。このことは、この世と異界との交流時における歌の重要性という点で注目される。

おわりに

以上、異界との交流と歌に対するアミの人々の認識について記述してきた。これらことからわかるのは、アミの人々にとって人間が異界と交流をもとうとするとき、あるいは異界から人間界に接触がなされようとするとき、歌とメロディーが両世界を結ぶための道具として、不可欠なものだと考えられているということである。

異界に住むカワスとの交流を専門としている宗教的職能者集団として、アミの部落にはシカワサイたちがいる／いた。神、化物、死者や祖先など、アミではこれらを含めてカワスというが、カワスはそれぞれ固有の歌とメロディーをもつとされている。シカワサイの役割は、必要な儀礼に必要なカワスたちを選択し、そのカワスたちの歌を歌って異界であるカワス世界と交流することである。

この異界との交流における歌の重要性は、宗教形態の変化により、アミの宗教的職能者であるシカワサイが、漢人的なタンキーへと移行した場合でもその重要性を失っていない。本来は憑依しなかったアミの神々は、漢人的なアミのタンキーに憑依するという形態上の大変化が起こしたにも関わらず、憑依したアミの神々は、憑依した肉体をとおして歌い、託宣を告げるという異界との接触時の歌の重要性を失っていない。あるいは、アミの神々の歌やメロディーを修得する機会がなかったアミのタンキーたちは、市販のテープでアミの歌曲を流すことで、異界との接触を試みているケースもみられた。

アミの部落で最も重要な年中行事は豊年祭ミリシンである。前年のミリシンから一年の間に死去した人々の魂アディオゴは、部落の全員が歌い踊る輪の中で、頭目と長老に

よってこの世に呼び出され、供物が奉げられる。

人が死去したとき、残された者が死去した者へ悲しみを伝える手段としても歌は使用されていた。そこでは号泣を奏でるメロディーによって、死者に悲しみを伝えるのである。

こうした歌による異界との接触は、人間界から異界への接触時に限られたことではない。異界から人間界に侵入してくる化物たち。そうした化物たちは、独特の唸り声をメロディーにのせて出現するとされている。

アミの人々にとって、異界との交流、すなわち人間界から異界への呼びかけ、あるいは異界から人間界への関わりが行われるとき、歌が両世界の橋渡しとして欠かすことのできない重要な道具であり、重要な方法だとみなされているのである。

#### 【注】

(1) シカワサイたちは、神からもらうツアライ *calay* とよばれる糸の道を歩くことで神を遙拝する場所にたどりつき、そこから供物を奉げる。原(2000)を参照。

(2) シカワサイは、血と家を通して継承されると考えられており、そうしたシカワサイになる者のなかからタンキーが出現している。アミの宗教の漢化については原(1999)を参照。

(3) 頭目は部落の統率者として、部落の儀礼をおこなう際に、過去に頭目であった死者たちに儀礼の報告をするのに必要だとされている。長老は部落の儀礼以外にもしばしば死んだ者たちへ話しかけるために必要な者とみなされている。長老はアミ語でマトアサイ *ma-to'as-ay* という。トアス *to'as* とは祖先のことで、長老を指すマトアサイとはアミ語ではトアスめいた人という意味を持つ。それゆえマトアサイである長老は祖先たちへ話しかける力をもつ者と認められていると思われる。

(4) バナナの葉はお祓いの道具として認められている。たとえば埋葬して墓地から帰って来た者は、家に入る前にバナナの葉で身体をなでてから家に入る。あるいはシカワサイは病気治療をするとき、バナナの葉で患者の身体をさすることで体内の病気の原因がバナナの葉について放出されると考えられている。

(5) 配偶者を失った者をアミ語でマダポノハイ *ma-daponoh-ay* という。特に配偶者を失ったばかりのマダポノハイは、とても恐れられる存在で、マダポノハイを見たり、近づいたりすると腹痛などがおこることがあると考えられている。それでマダポノハイが使用したものに触れると悪い影響を受けると考えられている。死後半年ほどたつてマダポノハイの生活を日常にもどすための儀礼がおこ

## 台湾アミの歌

なわれるがそれまでは、家や庭から出ることや人から見られることが禁じられる。だからこの期間は庭に出るときも人に合わないような時間帯にのみ出ることが許されている。もしマダポノハイが禁忌をおかして田畑にでると、急に天候が荒れるとされている。こうしたマダポノハイに対する観念については原（2001）を参照。

## 【参照文献】

- 台北帝国大学言語学研究室 1935『原語による台湾高砂族伝説集』
- 原英子 1997「台湾アミ族呪医シカワサイ儀礼の構成」（日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究』2 風響社）pp.61-109
- 原英子 1999「台湾アミ族における宗教の『漢化』」  
東京外国語大学アジア・アフリカ言文化研究所  
三尾裕子・本田洋編『東アジアにおける文化の多中心性』pp.121-153
- 原英子 2000『台湾アミ族の宗教世界』九州大学出版会 316pp.
- 原英子 2001「台湾アミ族のマダポノハイに対する観念—配偶者が死去した者への恐れと不浄観—」（日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究』5 風響社）pp.101-153
- 古野清人 1945「アミ族南勢蕃の祭祀組織」  
（『高砂族の祭儀生活』復刻版 1996 南天書局）  
pp.213-284

## 【謝辞】

本稿の資料は、平和中島財団による海外奨学金（1994年度、1995年度）で台湾調査をした際得た資料をもとに、2001年に台湾台北市の保安宮で保生文教基金会主催の健康・医療と信仰講演会シリーズ（健康・医療與信仰演講系列）で、「アミ族の女性呪医（阿美族的女性巫醫）」と題して話した内容を抜粋し、学術振興会科学研究費補助金（2001年度、2002年度 基盤研究（C）課題番号13610307）による台湾調査で得た新たな内容も付け加えてまとめたものである。現地調査でお世話になった方々、保生文教基金会関係者ご一同に感謝申し上げます。また、講演では中央研究院民族学研究所の林美容先生、同研究所助手だった劉瑩慧さんにお世話になった。お礼申し上げます。

（提出期日 2003年3月5日）